

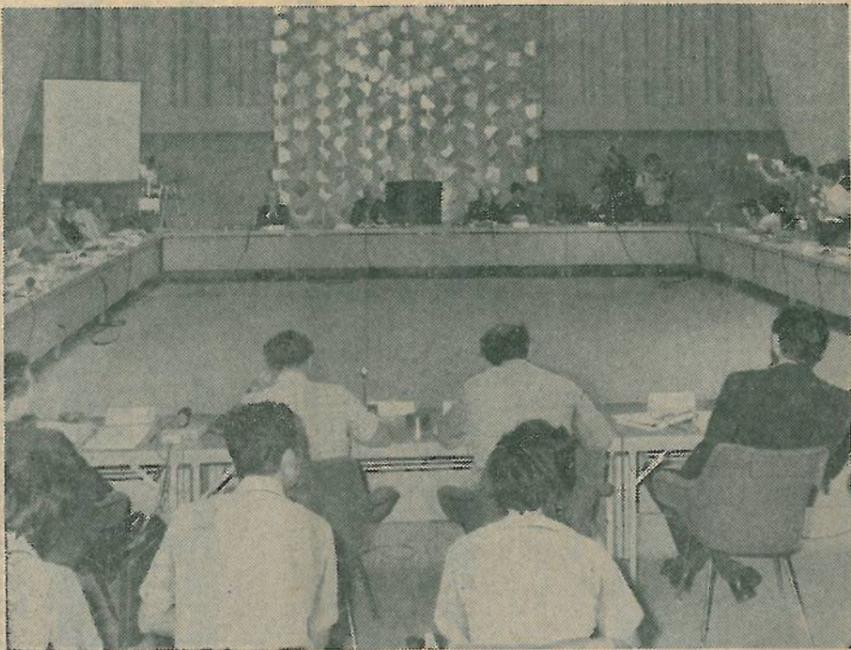
パグウォッシュ・シンポジウム 京都会議開幕

1975.8.28
京都 夕刊

17カ国の英知つどう

完全核軍縮へ真剣討議

核の完全軍縮を討議する第二十五回「パグウォッシュ・シンポジウム」が二十八日午前九時半から京都市左京区の国立京都国際会館で開幕した。同シンポジウムが日本で開催されるのは初めてで、開会式には日本はじめアメリカ、イギリスなど世界十七カ国から科学者、社会・経済学者ら三十六人が参加、病状生活の湯川秀樹京大名誉教授も車イスで駆けつけ、「完全核軍縮」を求める真剣な討議を呼びかけた。(11面に関連記事)



パグウォッシュ・シンポジウムの開会式 (京都国際会館で)

同シンポジウムは、九月一日まで五日間にわたって開かれるが、今回のテーマは「核の完全軍縮への新構想」で、大軍縮推進の間に、まず湯田利幸・シンポジウムの事務局長(名古屋大学教授)が司会として、「核軍縮をどう進めようか」と題を呼び、核軍縮の進め方について、湯川博士が「入院生活を送っているが、海外からの友人の歓迎の気持ちで参加する」と話した。

湯川博士は「核軍縮を妨げているのも軍人な要素は、核抑止の概念である。この概念は超大国の核武装が無限大の方向をとり、これは歴史的に核兵器の根絶と逆方向にある」と指摘、統一して「非核保有国の安全問題が、重要であり、まず第一に最小限、期待を寄せてほしい。すべての核保有国が核兵器を使わず、それによって脅迫しないという誓約である」と核兵器の非使用誓約を示唆した。

湯川博士は「核軍縮を妨げているのも軍人な要素は、核抑止の概念である。この概念は超大国の核武装が無限大の方向をとり、これは歴史的に核兵器の根絶と逆方向にある」と指摘、統一して「非核保有国の安全問題が、重要であり、まず第一に最小限、期待を寄せてほしい。すべての核保有国が核兵器を使わず、それによって脅迫しないという誓約である」と核兵器の非使用誓約を示唆した。

「シンポジウム」の準備会議に参加した学者は日本側から湯川、桐本義二郎両博士ら十一人、外国側はラッセル・ラインシニタイン宣言への最初の署名者の一入、ロートブラッド博士やマイゼンハフト元米国防務省の科学顧問をつとめたハーバート・ヨルク氏(カリフォルニア大物理学教授)ら二十五人。

c092-17-032